

「飽きた・・・」

ナシゴレンという料理を前にして、そろそろそんな言葉も漏れる時期だ。メダンに6ヶ月の滞在を決め込んで、5ヶ月が経った。

「メダン。」

「？」マークが飛び交う言葉である。「どこそれ??チリ?」みたいな。もちろん南米、ではなくインドネシアのスマトラ島にある結構大きめの都市のことであって、そこに調査と称して、今、僕は滞在している。

「藤森・村松研に入ると、世界のちょっとした片隅に飛ばされる！」

そんなことでも書けば、志願者の一人くらいは、筆を置くであろうか。それもいい。「藤森・村松研はモンゴル語話せないと入れない！」そんな噂もあるくらいだし。ちなみに僕はモンゴル語とやらを聞いたこともない。で、メダンに来たのも飛ばされた訳では毛頭なく、好きで来ているだけ。そこで体験談を書くよう頼まれた。だけど、藤森研に入った経緯を、あーや、こーや、書く資格は、実のところないので、それはパスして、「入ってよかったあ、入れてよかったあ」、と今ナシゴレンを前にして、僕には思える二、三の事情を書くことにする。

藤森・村松研の魅力。それは、勿論先生。藤森先生なくして、入ってよかったあも、へったくれもない。しかし、それだけでないのが藤森研の良さ。村松さんがいる。今は、村松研ができたけれども、僕が入った時は藤森研の助手。そして、今も別に変わってないが、藤森先生と村松さんとの両輪が、研究室の爽快な疾走を生み、その風をひたひたと感じている次第。

藤森先生との実質ファーストコンタクト。それは入室早々の「一夜亭」の現場作業。建築物は「もの」。建築は、その「もの」をつくること。そんな極めて単純なようで極めて曖昧とした事実に、いろいろな思いを巡らせてさまざまなアプローチをしているのが建築界。めちゃくちゃ楽しい土壁塗りをしながら、そのことに気づかされ、それを一生忘れまいと心に刻んだ一日だった。

さらにその日は、竣工日。作業と見学が同時にできるおいしい日。先生の作品を見たのは、これが最初という不届き者。「タンポポハウス」などの言葉は知っているから外観を見た時は、そうはおののかない。けどついに内観に到達。おののいた。安い言葉であるが、鳥肌立った。その後いろいろ「良さ」とやらを考えた。けど、立ってしまったんだから仕方がない。その時、思った。これまで世界中にあまたとある建築物をほとんど見てなく、建築の「原風景」なるかっこいい体験もないが、建築は魅力的で、その建築とつながるとくために歴史をしよう。そんな背中がかゆくなるような言葉を吐いてしまうくらい、忘れられない良い一日になった。

「お前らは井の中の蛙だ」。それが蛙好きの村松さんに言われた最初の言葉である。まあ、実際はこんな S 的な発言ではなく、「井の中から抜け出よう」であり、本当の事を言えば、最初の言葉は「君、日本人？」であった。村松さんは僕らに「アジア」という領域を見せてくれる。「地球」ほど広くもなく、「六本木」ほど人受けしない、井の中から初めて出るにはちょうどいい領域である。(いまはその「地球」をターゲットにしていなくもないが。)

その領域へ調査に出て行って思ったこと。

「建築は訳が分からない。建築は曖昧。だから多様。けど、単純。そして普遍的。」

村松さんを中心にして活動が行われている mAAN (近代アジア建築ネットワーク)。これはネットワークのこと。研究や作品が個別のであっても、普遍的なことがあれば、コミュニケーションができる。つまりネットワークを持てる人にならなければならない。そういう視点を与えてくれた。

こんな体験は、まさに両輪のなせる技だ。

で、僕は今、メダンにいる。今に至るまでに、重要な視点をあたえてくださった方が他にもたくさんいる。それも勿論、藤森・村松研に入ったがゆえの体験であるが、それはまた別の話なので筆は置こう。また研究室の方々の研究は実にいろいろである。けれど、藤森・村松研に漂う以上のような視点によって、「個々」はつなげられ、多くのアドバイスをもらえる。こんなゼミは楽しい。

冒頭のナシゴレンは、単なるピリ辛焼き飯。おいしいけれど、ここは料理にあまりバリエーションがない。落ちそこないのフォークしか投げられない奴くらい、ない。けれど、建築は結構多様かな。まあともかく、藤森・村松研は多様。

藤森先生の大きな背中を見ながら、村松さんのズシリと重い言葉を聞く。

「30までにネットワークをつくらないと、後はだめですよ。」

そう、らしい。けど、チャンスはある。そんな研究室のような気はするんだけど。